

お茶の水女子大学 AO 入試の現状

加藤敬子

お茶の水女子大学 教育開発センター

Status of the Admissions Office Selection at Ochanomizu University

Keiko KATO

Ochanomizu University Center for Research and Development of Education

This paper is the first comprehensive report on status of the Admissions Office Selection at Ochanomizu University, which is successfully executed since the 2008 admission. It includes various analyses of “Application Document”, “Questionnaires about AO Applicants” right after the two-day selection and Grade Point Average (GPA) after entrance. Through these analyses, mostly by statistical methods, the selection method itself is proven much accepted by most applicants, who see it brings them a new good opportunity of self-discovery and very strong motivation to study at Ochanomizu. Most of the selected applicants actually show significant superiority in academic achievements after entrance. However, we only have four year experience with this new selection and GPA is one of the aspects where we should evaluate the AO selection, so we still need to continue analyses further year by year, observing some new aspects such as career after graduation, satisfaction with college life, extracurricular activities, etc.

keywords : university entrance examination system, AO Selection, admission policy, group discussion, group interview

はじめに

近年の急速な少子化やグローバル化の進展する社会変化に伴い、大学進学率の増加や 18 歳人口の減少は著しく、大学入試制度も従来の学力試験中心の選抜からアドミッション・オフィス (AO) 入試や推薦入試などが取り入れられ、入学者選抜の多様化が推進されている。

我が国では、1990 年に慶応大学で AO 入試が初めて導入され、1997 年に中央教育審議会が AO 入試を提言。2000 年度から国立大学でも AO 入試が開始されるようになり、徐々に増加し、2008 年度には国大協は AO・推薦の定員枠を 3 割から 5 割に拡大する方針を示した。2011 年度には国立大学のうち 47 大学 (57.3%) で AO 入試が実施されている。このような状況下において、お茶の水女子大学は 2008 年度から国際性・学際性・コミュニケーション力・意欲等を重視する AO 入試を実施している。本稿はこのお茶の水女

子大学 AO 入試の現状を報告することを目的とする。

AO 入試の概要

お茶の水女子大学 AO 入試の趣旨は、「学際性と国際性をもった将来の女性リーダーには通常の学力試験には表れない総合的な力 (ポテンシャル) が重要である」とし「このような資質を持った学生を、広く各地から選抜する」ことであり、求める人物像は「本学での勉学に強い意欲と専門性を磨いていくために必要となる十分な基礎学力を持っている」ことを基盤に、「1 知識や意見を人に伝え、実践するためのコミュニケーション能力や応用力を備えている 2 真理の探究に対する憧憬と文・理双方への興味・関心をもっている 3 自分の将来と社会の未来へのビジョンを明確にもっている 4 グローバルな視野をもって思考し、国際的な場での活動を希望している」の 4 つを挙げ、いずれか 1 つ以上に当てはまることであると提示している。

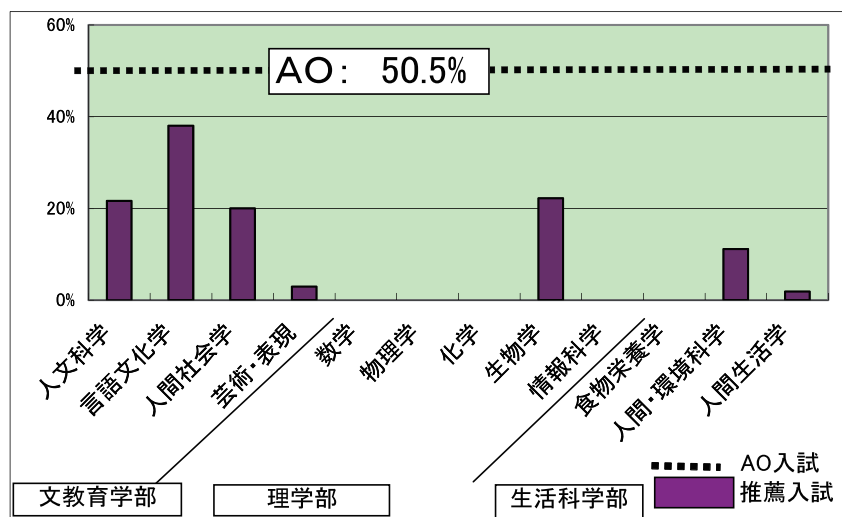


Figure 1 志望理由書での「グローバル要素」記載頻度
対象者数 AO 99 推薦 367

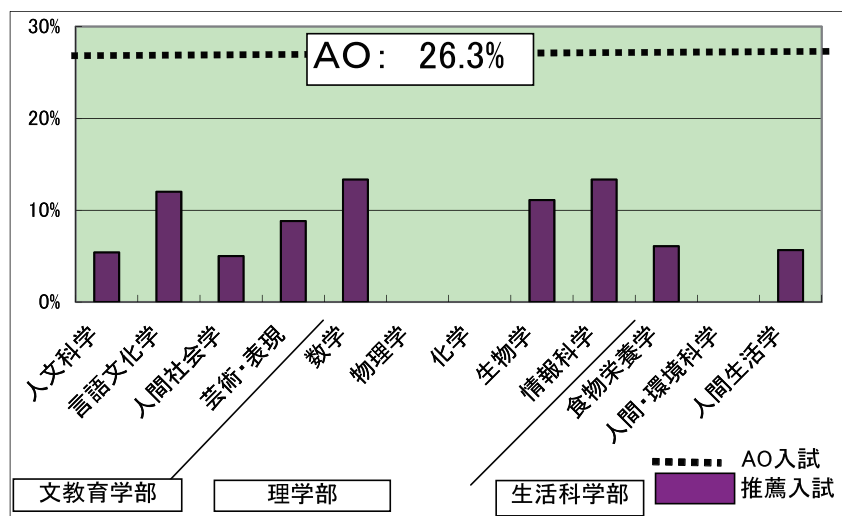


Figure 2 志望理由書での「文理双方への関心」記載頻度
対象者数 AO 99 推薦 367

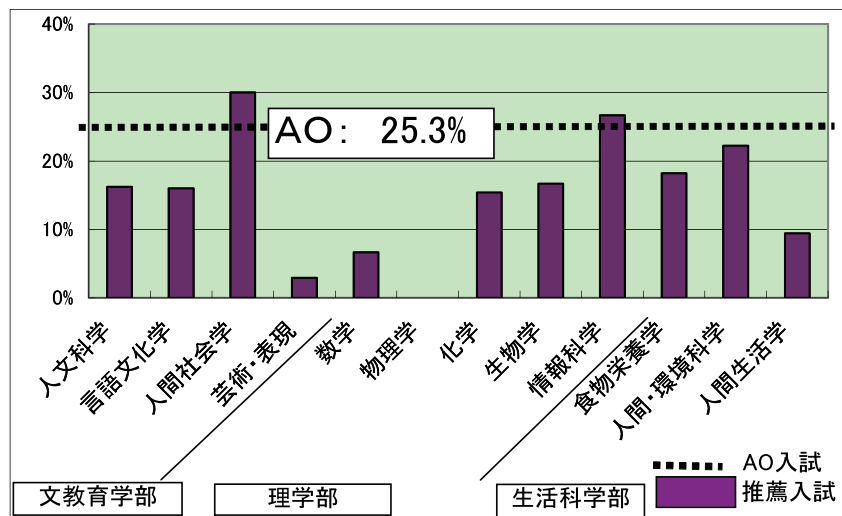


Figure 3 志望理由書での「女性リーダー育成」記載頻度
対象者数 AO 99 推薦 367

このようなアドミッション・ポリシーに沿って、全学枠で実施。選抜方法は一次選抜で高校の調査書、志望理由書、活動報告書の書類選考を行い、二次選抜では一次合格者を対象に、日本語による講義、英語による講義、グループ討議、小論文、グループ面接(学科によっては個別面接あり)を実施している。日本語による講義は、文理双方に関心を持つ人を求めていることから、1つのテーマで文系講義と理系講義を行っている。因みに、今までのテーマは「確からしさ」「個について」「時間」「分かち合うことと奪い合うこと」であった。講義レポートを作成し、その後、講義テーマに関してのグループ討議を経て最終的に自己の考えを小論文でまとめるというものである。

志願者(出願要件に満たない者を除外した受理数)は2008年度99名(競争率11.0倍)2009年度63名(6.3倍)2010年度81名(13.5倍)2011年度57名(7.1倍)であった。

また、AO入試は高校から大学へのスムーズな連携を目指す高大連携の新たな入試であり、大学選抜から入学まで期間の長い入試と捉え、合格後大学入学までの間には入学前教育を行っている。

本稿では、志望理由書、AO入試事後アンケート、入学後成績分析を通して実施状況を見ていくことにする。

志望理由書

本学AO入試の特徴の一つは2000字に及ぶ志望理由書にある。志望理由書は推薦入試でも提出するが、字数はAOよりかなり少ない。出願書類は志望理由書、活動

報告書、高校調査書を提出する。志願者は活動報告書と合わせて志望理由書を作成することによって、自分の成長を振り返り、今後の進路・将来の展望を熟考する機会となっている。活動報告書は他大学の AO 入試の場合殆どが高校の期間の活動となっているが、本学は 2～3 年という短い高校の期間だけでなく、中学・高校という 6 年間を設定して自らの成長を十分に検討するよう図っている。また、大学選択に際し大学進学 mismatches を防ぐためにも、本学が AO 入試で求める人物像を提示しているのであるが、これがどの程度、認識されているのかを志望理由書に焦点を当てて分析を行った。

本稿においては志願者が最も多かった 2008 年度を対象に志望理由書を提出する推薦入試と比較した。調査方法はアドミッション・ポリシーで示している文理双方への関心・グローバルな視野・女性リーダーの 3 項目について志望理由書に反映されているかどうかを検証する。3 項目に関連するキーワードを抽出し、その記載頻度を内容別に分析したのが Figure 1～3 である。

まず、「グローバル要素」については「国際的」「世界交流」「国連職員」などグローバルな内容が記されているもので、AO 志願者においては 51.5% と約半数が言及しているのに対し、推薦入試は言語学科で 38% であるほかは、理学部や生活科学部では記載されているケースが少ない。「文理双方への関心」は「文理融合リベラルアーツ」「学際性」「他分野も幅広く」などの内容を記しているもので、AO の 26.3% に対し推薦では 15% 以下と低くなっている。「女性リーダー」については将来の展望の中でリーダーや先導などに関して述べたもので、AO は 25.3% で推薦でも 20% 前後のところが多い。すなわち、AO 入試志願者においてグローバル要素や文理双方の関心が高く、本学が提示する人物像が認識されていると解せる。推薦入試については学科毎に実施されるため、学科毎のアドミッション・ポリシーとの適合性を分析したが、本稿では割愛する。

なお、AO 志願者の志望理由書の中で、アドミッション・ポリシーで提示した、「コミュニケーション力」「文理双方への関心」「女性リーダー」「将来への展望」の 4 項目について、各人の記載項目数を調べたところ、全員が 1 項目以上に言及している。2 項目に言及しているものは 99 人中 44 名で最多、次いで 3 項目に言及しているものが 27 名、1 項目が 25 名、4 項目の記載者も 3 名あった。このことから、AO 志願者は、志

望理由書を書くにあたってアドミッション・ポリシーを強く意識していることがわかる。

また、本学では AO 生への面接による追跡調査も行っているが、志望理由書についての感想を見てみると、当初、長い志望理由書が課されていることに圧倒され、字数の少ない他大学 AO 入試にしようかと迷ったが、漠然と考えていた将来への展望を具体的に真剣に考える貴重な機会となったことが指摘されている。

AO 入試事後アンケート

AO 入試二次選考における理系講義・文系講義・英語講義・グループ討議・グループ面接は受験生にどのように受け止められているのであろうか。毎年二次選考終了後に実施している無記名アンケートを分析した。

各質問項目について経年変化を見たが、特に目立った違いはなく、2008～2011 年度までの全体的傾向を捉えることとする。「どこで AO 入試を知りましたか」(複数回答)については、ホームページ：59.3%、オープンキャンパス：48.9%、高校教師：24.2%、両親：5.6% と続く。「オープンキャンパスに参加したか」については、YES: 78.7%、NO: 21.3% で年々参加率が漸増している。「応募への決定」に際しては、2008 年度から 2011 年度の 4 年間を通じ、「両親と相談」71.4% が最も多く、約半数が「高校の先生と相談」して決めており、「自分一人」は 29.2% にとどまっている。本学受験生の進路決定においては、両親や高校教師の影響が大きいことが窺われる。

各課題については、二次選考実施の各課題に対する受験生の評価を問うものである。例えば、グループ討論では、「おもしろかったか」「難しかったか」「興味を持てたか」「自信をもてたか」「緊張したか」について 5 段階で評価し、もっとも肯定的な回答を 5 とし、もっとも否定的な回答を 1 とし、「どちらでもない」という回答を 3 として数値化している。各講義およびグループ面接についても同様の視点で質問している。

Figure4～8 は理系講義、文系講義、英語講義、グループ討論、グループ面接について 4 年間のデータを示したものである。各年ほぼ同じ傾向であるが、グループ討論の経年変化において、2008 年では「おもしろかった」と肯定的な評価は 75% であったのが、2009 年以降は 95% と増加しており、グループ討論への抵抗が希薄になってきている。各課題において

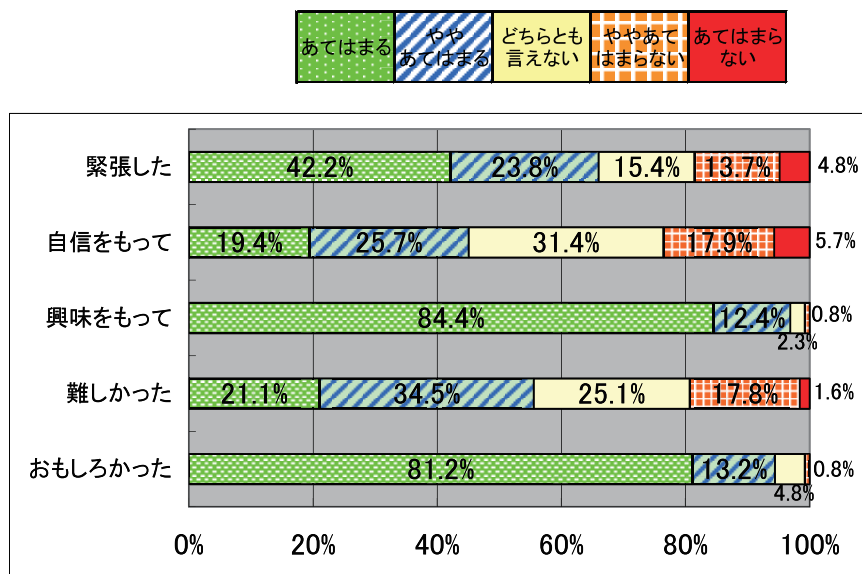


Figure 4 理系講義の評価 2008-11 年度の 4 年間平均

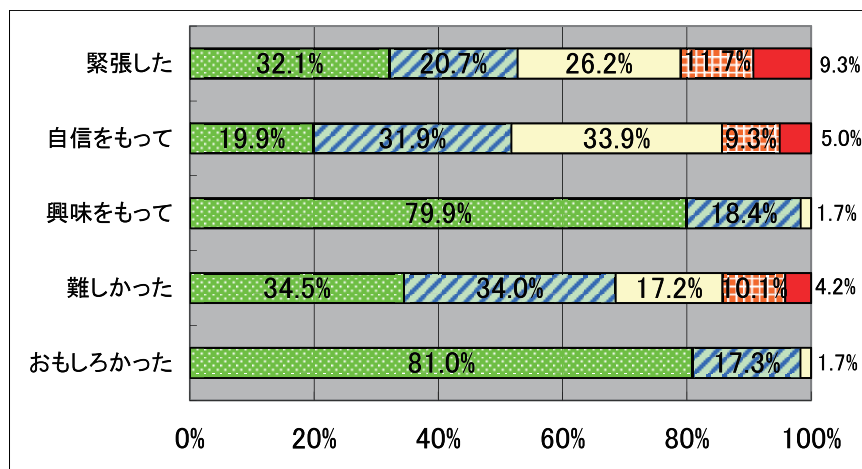


Figure 5 文系講義の評価 2008-11 年度の 4 年間平均

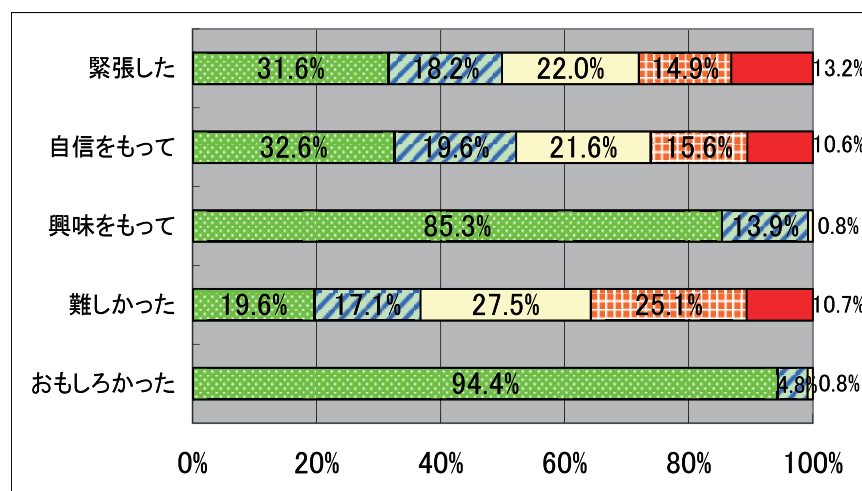


Figure 6 英語講義の評価 2008-11 年度の 4 年間平均

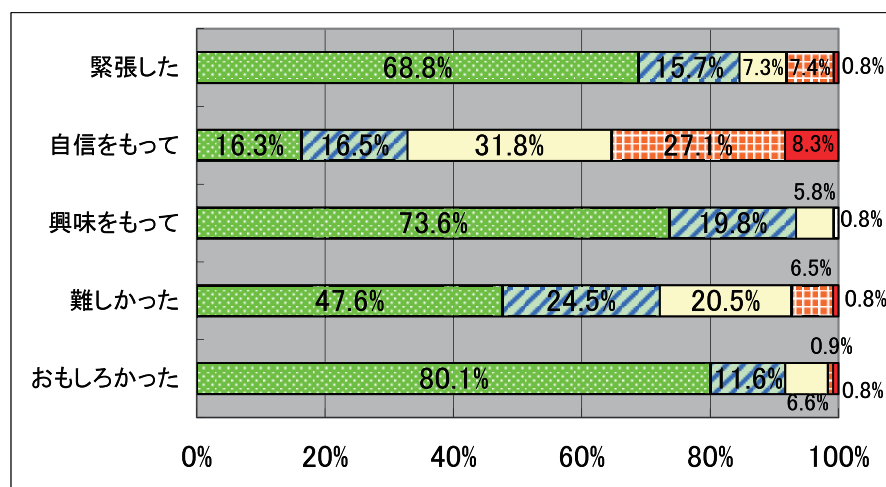


Figure 7 グループ討論の評価 2008-11 年度の 4 年間平均

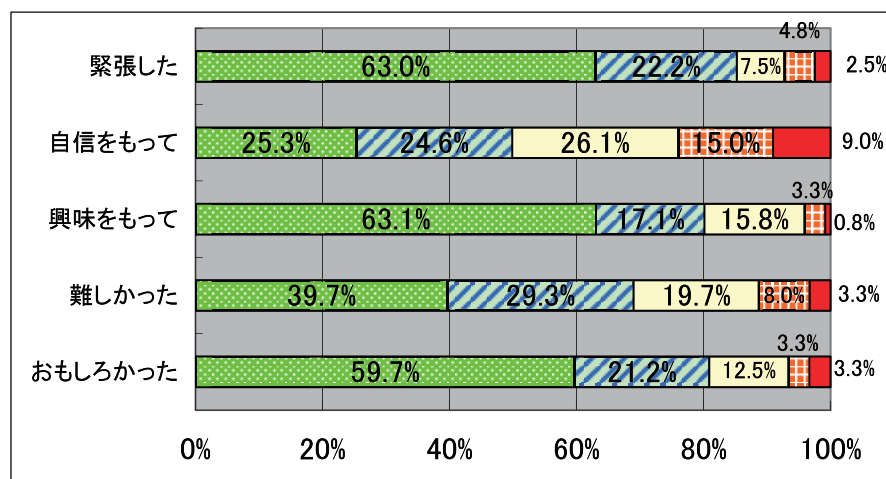


Figure 8 グループ面接の評価 2008-11 年度の 4 年間平均

「興味をもつ」や「おもしろかった」が90%以上を占めていることが注目される。

各課題についての相関を示したのがTable1とFigure9である。AO入試の特徴であるグループ討論やグループ面接のグループ課題に対する評価と講義の相関に注目してみよう。

従来、個人別に取り組んでいた入試課題に対し、グループでの課題を与えることによって、コミュニケーション力、リーダー性、集団への適応性などを評価しようとするものである。講義についても、グループ課題についてもそれぞれの課題に興味をもつてのぞんだのでおもしろかったという結果であるが、講義については、緊張したがおもしろかったという傾向が見られる。一方、グループ課題では、自信をもつてのぞんだから、おもしろかったという傾向も見られる。しかし特筆すべきは、自信をもつてのぞんだから難しくなか

ったという因果関係には必ずしもなっていないことである。また、緊張したから難しかったということでもない。

講義とグループ課題との関係については、受験者の得手・不得手を反映してか、講義をおもしろかったとする評価とグループ課題をおもしろかったとする評価には統計的には有意ではないが、弱い負の相関がある。

また、自信についてだけは、講義に自信をもつてのぞんだ受験者は、グループ課題にも自信をもつてのぞみ、講義に自信のなかった受験者はグループ課題にも自信がなかったということが明白である。(Figure 10 参照)

「文系だから理系には興味がなく、よくわからない」その逆に、「理系だから、文系の問題にはどうもなじ

Table 1 講義とグループ課題に分けて見た評価項目間の相関関係

相関係数		おもしろかった		難しかった		興味をもって		自信をもって		緊張した	
		講義	G課題	講義	G課題	講義	G課題	講義	G課題	講義	G課題
おもしろかった	講義	1.000	-0.154	0.060	0.259	0.694	-0.131	-0.039	-0.193	0.433	-0.102
	G課題	-0.154	1.000	-0.074	-0.248	-0.107	0.692	0.326	0.451	0.111	-0.211
難しかった	講義	0.060	-0.074	1.000	0.038	-0.051	0.208	-0.008	0.299	0.343	-0.176
	G課題	0.259	-0.248	0.038	1.000	-0.127	-0.100	0.109	-0.165	0.075	0.235
興味をもって	講義	0.694	-0.107	-0.051	-0.127	1.000	-0.091	0.233	-0.029	0.301	-0.071
	G課題	-0.131	0.692	0.208	-0.100	-0.091	1.000	0.278	0.385	0.217	-0.180
自信をもって	講義	-0.039	0.326	-0.008	0.109	0.233	0.278	1.000	0.540	0.198	-0.019
	G課題	-0.193	0.451	0.299	-0.165	-0.029	0.385	0.540	1.000	0.142	-0.057
緊張した	講義	0.433	0.111	0.343	0.075	0.301	0.217	0.198	0.142	1.000	-0.002
	G課題	-0.102	-0.211	-0.176	0.235	-0.071	-0.180	-0.019	-0.057	-0.002	1.000

注: 相関係数は、それぞれの評価で肯定的回答(5または4)をした数を使用して計算したもの

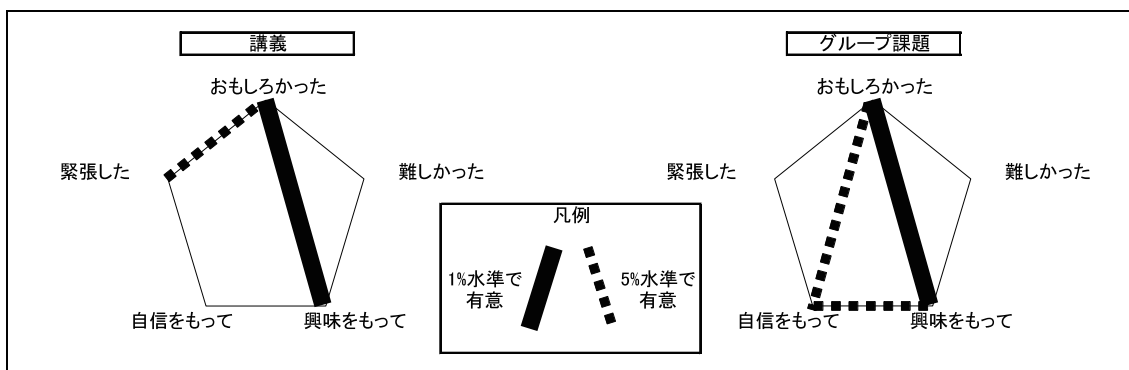


Figure 9 講義とグループ課題についての相関関係

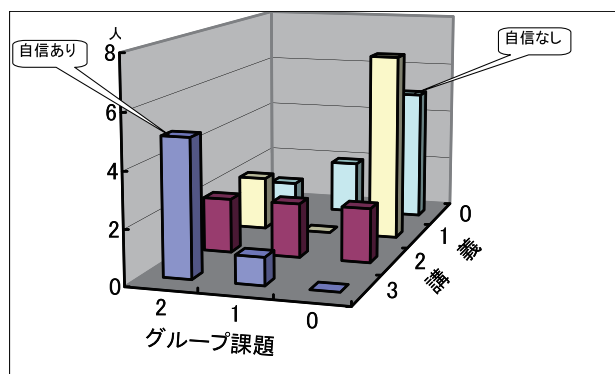


Figure 10 自信をもつてのぞんだ課題数

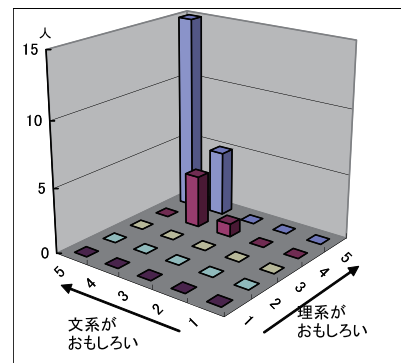


Figure 11 講義のおもしろさ

めない」など、文系理系と互いにレッテルを貼り、壁を作ってしまうことが多々見受けられるが、AO入試の受験生は如何であろうか。Figure11-14に示すように、文系講義と理系講義の相関を見てみると、ほぼ全員が両方に興味をもち、両方の講義を聞いて面白いと感じている。難しさや自信の有無ではばらけるが、いわゆる理系のタイプと文系のタイプというような明確な両極化はしていない。その意味で明らかに文理双方への関心と適性をもった集団と見てよい。まさに、AO入試の狙いとする人材が集まってきてい

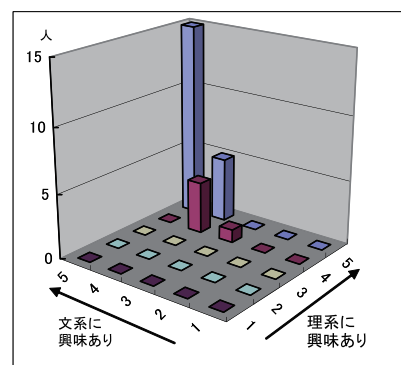


Figure 12 講義への興味

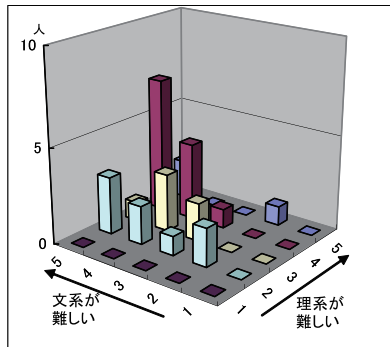


Figure 13 講義の難しさ

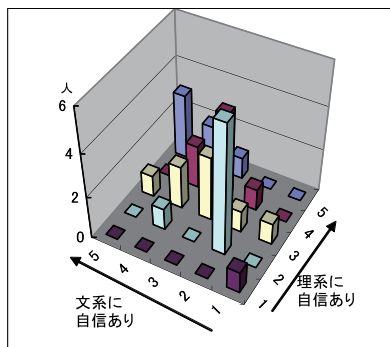


Figure 14 講義への自信

ると言える。

自由記述については様々な感想が述べられているが、大別すると次の4つとなる。1 楽しく有意義であったとするもの。緊張したが、講義を聞いたり討論したりして深く考え真剣に議論することの楽しさを知ったとする者で自由記述の中で最も多かった。2 より一層お茶大で学びたいという意欲が強まったと記したものの。たとえ、不合格となっても他の入試方法で何度でもチャレンジする決意がついたなど大学選択につながるものが次いで多かった。3 新しい自己発見につながったとするもの。文理双方の講義や討論等を経験することによって、自己の長所や短所が明確となり、新しい自分に会え成長できた事に意義があったとする者で、AO入試の効果として注目される。4 入試方法について述べたもの。本学のAO入試を経験したことによって、本学の真剣さを肌で感じ、理想的な入試方法であると評価しているものである。概して、実際に本学AO入試を経験したほぼ全員が好評であり、新しい自己発見や意欲の向上につながっていると捉えられていることが明らかとなった。入試方法にまで言及する者が数人あったことは驚きであり、入試制度への関心の高まりを感じた。

入学後の成績をAO入試による入学生(本稿ではAO生と称する)、推薦、一般前期、一般後期による入学生の入試方法別に見てみよう。成績追跡年度は、現時点(2010年12月)で判明している2009年度と2008年度を対象とする。AO生は2008年入学の9名、2009年10名、推薦は2008年99名、2009年98名、一般前期2008年300名、一般後期77名、2009年推薦98名、一般前期310名、一般後期64名である。

お茶の水女子大学では成績評価は履修科目に対しS・A・B・C・Dの5段階評価で表記し、S・A・B・Cは合格、Dは不合格としている。Sは「基本的な目標を十分に達成し、きわめて優秀な成果をおさめている」ものである。

成績評価をS(=4点)、A(=3点)、B(=2点)、C(=1点)、D(=0点)と数値化し、個人別に履修科目の成績点数合計を履修科目数で割った、平均値GPA(Grade Point Average)を求め、学部学科毎に算出した。各学部ともAOが最も高いGPAである点においてほぼ同じ傾向であったが、個人情報の観点より全学部データで記載する。未記入・履修放棄は極少数であるため対象外とする。

GPAにより、学生の1年次ないし2年次の成績がその学生の所属する学部や学科の中での相対的な位置が判るが、学部によってGPAの分布は少し異なるので、全学部の中での位置を見る場合には、学部ごとのGPAの平均点と標準偏差に基づき、「偏差値」を使用するものとする。なお、どこに差異が見られるのかについては、授業グループと分野によるカテゴリー区分で、より小さい単位でのGPAを評価することにする。このカテゴリーとして、基礎教養科目、専門基礎科目、全学共通科目を含むその他に分類し、基礎教養科目はさらに、基礎ゼミ・基礎講座、総合科目・情報、外国語、スポーツ健康、文理融合リベラルアーツの小区分を設け、専門基礎科目は所属学部の授業と他学部の授業に区分して分析した。

入試方法との関連で言えば、AO生はそれぞれの学部で平均を上回る成績を上げている者が多いが、偏差値を使用することで全学部の中での存在について、全体の平均とAO生の平均の差異が統計学的に5%ないし1%水準で有意かを判定する。一般前期、後期と推薦入学生に対し、AO生は対象者数が少ないため、学部別ではなく、全学部で比較分析したもので、全体を母集団としたときに、特異なサンプルと見なせるか

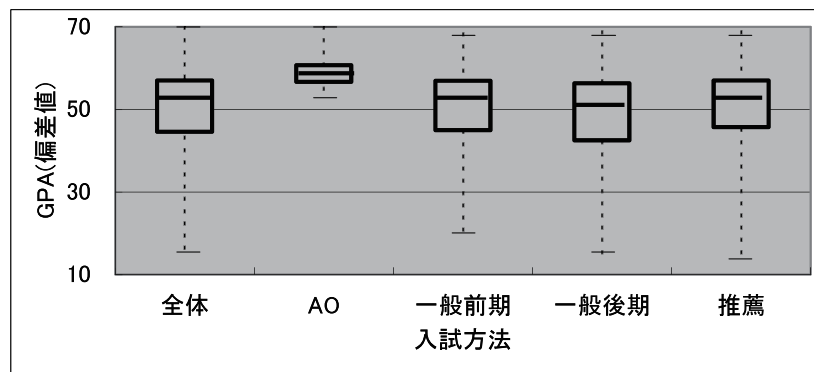


Figure 15 入試方法別 GPA 偏差値の分布 -2008 入学生

Table 2 平均値の有意差検定 - 2008 入学生

	AO	一般前期	一般後期	推薦
全体との差異	9.1	0.3	-1.6	-0.1
<i>U</i>	2.832	0.469	-1.408	-0.093
<i>Prob</i>	0.0023	0.3197	0.9204	0.5372
有意水準	1%水準	有意差なし	有意差なし	有意差なし

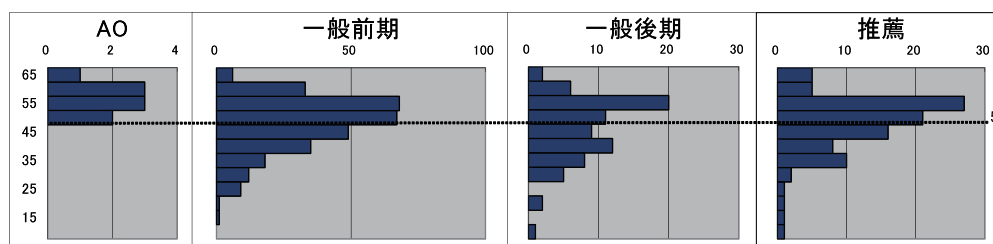


Figure 16 入試方法別 GPA(偏差値) の分布 -2008 入学生

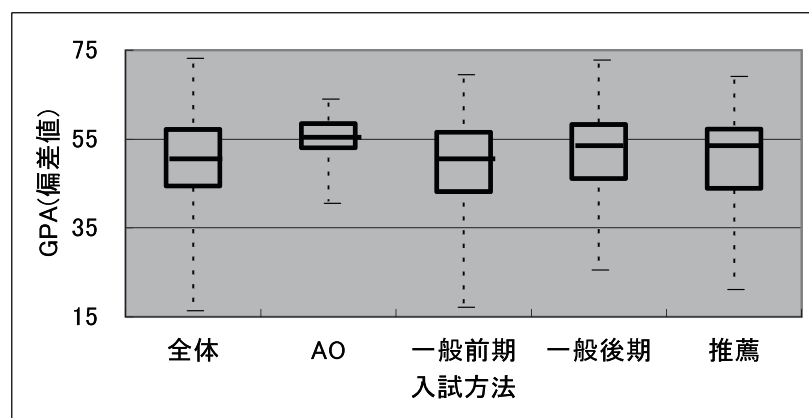


Figure 17 入試方法別 GPA 偏差値の分布 -2009 入学生

どうかを二つの手法で表示してみよう。一つ目の手法は、分布がどの範囲にわたり、その中で中央値と四分位数がどこに位置するかを表示する「箱ひげ図」である。もう一つは、度数分布を並べて表示し、その平均に全体の分布と比べて有意差があるかどうかを検定するものである。

また、AO 生の成績優位はどの授業グループ・分野に見られるかについては、レーダーチャートで表示し、平均値の差異の有意性検定を行った。

Figure 15 と Figure 17、あるいは Figure 16 と Figure 18 から共通して言えることは、2008 年入学者と 2009 年入学者で結果に多少の差はあるが、AO

Table 3 平均値の有意差検定 - 2009 入学生

	AO	一般前期	一般後期	推薦
全体との差異	5.3	-1.1	2.1	0.3
<i>U</i>	1.676	-1.832	1.670	0.277
<i>Prob</i>	0.0468	0.9665	0.0474	0.3908
有意水準	5%水準	有意差なし	5%水準	有意差なし

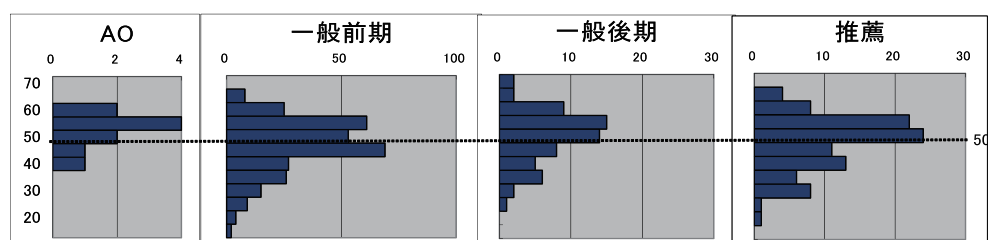


Figure 18 入試方法別 GPA(偏差値)の分布 -2009 入学生

生が入学後の成績で明らかに優位に立っていることである。Table 2 と Table 3 の平均値の有意差検定では、5% もしくは 1% 水準での有意性を示している。AO 生以外では、2009 年の一般後期合格者を除いて、その分布は全体と大差がなく、下位に広がりをもつベル型を描いている。

2008 年度入学者は 1 年次成績だけでなく、2 年次の成績においても、AO 生は全入試方法の中で最も高い成績であった。

GPA 比較の他、S の取得率においても AO が最も高く、また、不合格である D の取得率においても AO が最も低かった。

次に AO 生はどのような授業で好成績となっているのかを分析する。

Table 4 ～ 6 は授業グループ・分野別成績を示したものである。2008 年の入学者については 1 年次の履修科目と 2 年次の履修科目に分けて分析を行った。

AO 生の成績と全体の成績を比較すると、すべての分野で AO 生の優位が認められるが、全体を母集団としてそこから取り出された標本である AO 生の成績の差異が統計学的に有意と言えるかどうかを検定した。Figure 19 ～ 21 は、その結果をレーダー・チャートにしたものである。

2008 年入学者も 2009 年入学者も AO 生は、全体の学生の授業グループ・分野別の GPA と比較した場合、文理融合リベラルアーツと専門基礎科目で圧倒的な優位を示している。その平均値の差は統計学的に 1% 水準での有意を示している。

最後に、大学入試センター試験の成績と入学後の成績 GPA との相関を、AO 生の在籍する学科について見てみよう。本学では高校生活を最後まで全うするよう AO 生の入学前教育において大学入試センター試験の受験を課している。AO 生のセンター試験の素点を

Table 4 2008 年入学者の授業グループ・分野別成績 (2008 年履修科目)

2008年履修科目(全学部)

授業グループ	AO	全体	差異	<i>U</i>	<i>Prob</i>	有意水準
基礎教養科目	2.960	2.593	0.367	5.840	0.00000	有意: 1%
基礎ゼミ・基礎講座	2.900	2.776	0.124	0.985	0.16225	有意差なし
総合・情報など	2.971	2.559	0.412	4.168	0.00002	有意: 1%
外国語	2.857	2.422	0.435	2.696	0.00351	有意: 1%
スポーツ健康	3.000	2.746	0.254	1.667	0.04772	有意: 5%
文理融合リベラルアーツ	3.118	2.635	0.483	2.767	0.00283	有意: 1%
専門基礎科目	2.921	2.562	0.360	4.334	0.00001	有意: 1%
他学部基礎科目	2.750	2.670	0.080	0.231	0.40883	有意差なし
その他全学共通・教職など	3.000	2.529	0.471	2.567	0.00513	有意: 1%
全科目	2.947	2.578	0.369	3.847	0.00006	有意: 1%

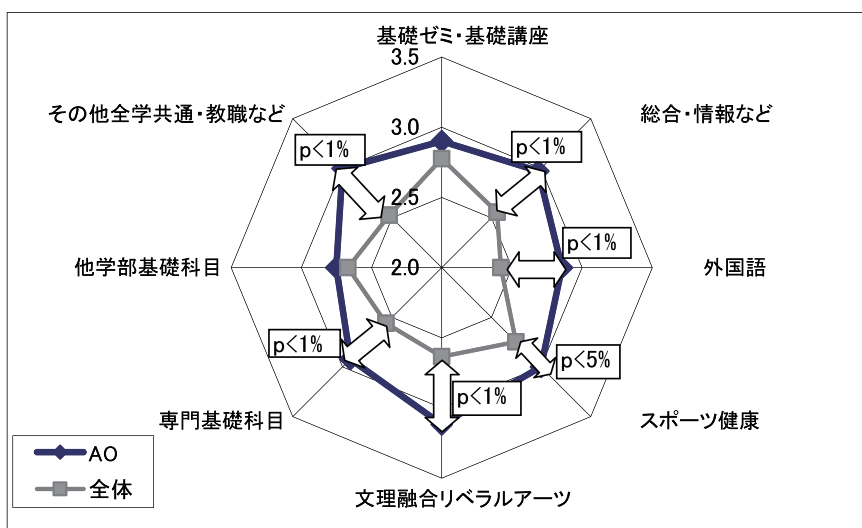


Figure 19 2008 年入学者の授業グループ・分野別成績 (2008 年履修科目)

Table 5 2008 年入学者の授業グループ・分野別成績 (2009 年履修科目)
2009年履修科目 (全学部)

授業グループ	AO	全体	差異	U	Prob	有意水準
基礎教養科目	2.930	2.366	0.564	4.003	0.00003	有意: 1%
基礎ゼミ・基礎講	2.667	2.193	0.474	0.882	0.18878	有意差なし
総合・情報など	3.000	2.655	0.345	0.633	0.26341	有意差なし
外国語	2.900	2.408	0.492	2.430	0.00754	有意: 1%
スポーツ健康	3.000	2.453	0.547	0.585	0.27915	有意差なし
文理融合リベラ	3.000	2.331	0.669	2.907	0.00183	有意: 1%
専門基礎科目	3.061	2.568	0.492	7.007	0.00000	有意: 1%
他学部基礎科目	2.556	2.431	0.125	0.414	0.33961	有意差なし
その他全学共通・教職	3.000	2.554	0.446	2.471	0.00674	有意: 1%
全科目	3.009	2.523	0.486	8.287	0.00000	有意: 1%

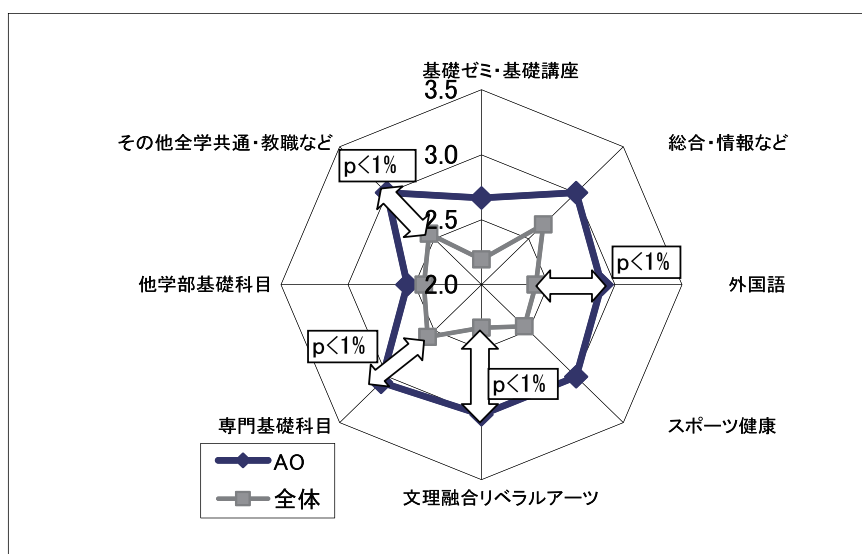


Figure 20 2008 年入学者の授業グループ・分野別成績 (2009 年履修科目)

Table 6 2009 年入学者の授業グループ・分野別成績

全学部

授業グループ	AO	全体	差異	U	Prob	有意水準
基礎教養科目	2.784	2.560	0.224	3.349	0.00041	有意: 1%
基礎ゼミ・基礎講座	2.733	2.389	0.345	1.462	0.07187	有意差なし
総合・情報など	2.944	2.758	0.187	1.218	0.11152	有意差なし
外国語	2.600	2.500	0.100	0.871	0.19199	有意差なし
スポーツ健康	3.000	2.844	0.156	1.423	0.07734	有意差なし
文理融合リベラルアーツ	2.875	2.520	0.355	2.708	0.00339	有意: 1%
専門基礎科目	2.759	2.550	0.208	2.405	0.00808	有意: 1%
他学部基礎科目	3.000	2.608	0.392	1.395	0.08144	有意差なし
その他全学共通・教職など	2.636	2.505	0.132	0.897	0.18475	有意差なし
全科目	2.764	2.552	0.212	5.370	0.00000	有意: 1%

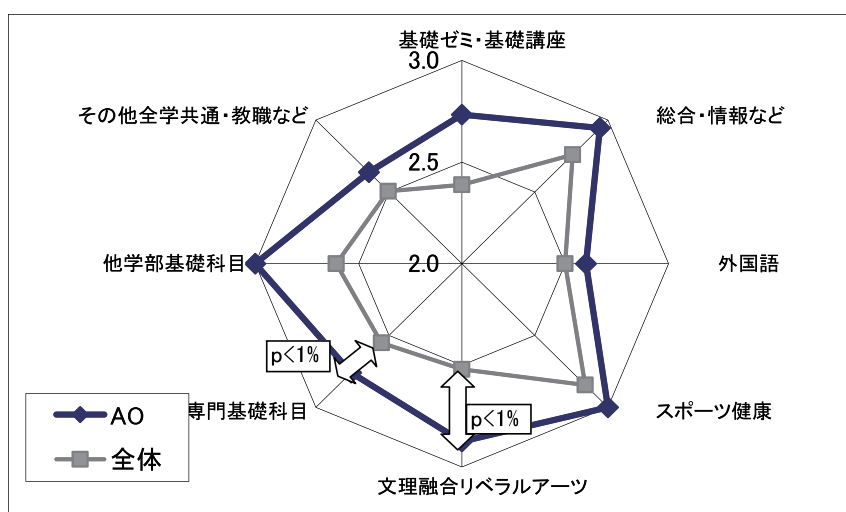
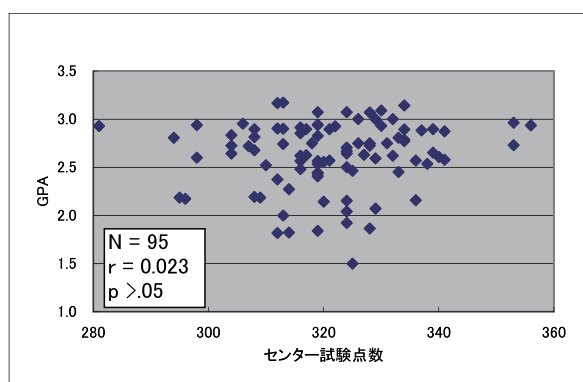


Figure 21 2009 年入学者の授業グループ・分野別成績 (2009 年履修科目)

Figure 22 センター試験点数と入学後成績 (GPA)
文教育学部 (2 学科)

各学科の配点に換算し学科毎に分析した。センター入試に取り組む姿勢に一般入試受験生と決定的な差があるため、同一条件での比較にはならないことを付記しておく。

Figure22～24 は AO 生と一般前期生のセンター試験点数と入学後の GPA の相関を散布図で示したものである。データは 2009 年度における AO 生と一般前期入学生で配点が同一の学科である。これらの図から、センター試験の点数と入学後の成績の間には、文教育学部と理学部においては有意の相関は見られない。特に、文教育学部においては無相関ということを確認に示す結果となっている。殆どの AO 生はセンター試験成績の学科内順位から入学後の成績順位が飛躍的に上昇している。すなわち、入学後の成績についてはセンター試験の他にさらに大きな要因が関連していると考えられる。ただし、AO 生の在籍している学科だけを標本とした 2009 年の結果であるので、もう少し年次を重ねて、あるいは AO 生の在籍学部に広がりを見せてからの分析を待つ必要がある。

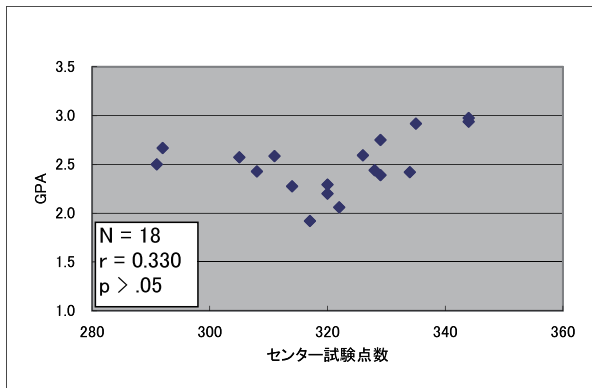


Figure 23 センター試験点数と入学後成績 (GPA)
理学部 (1 学科)

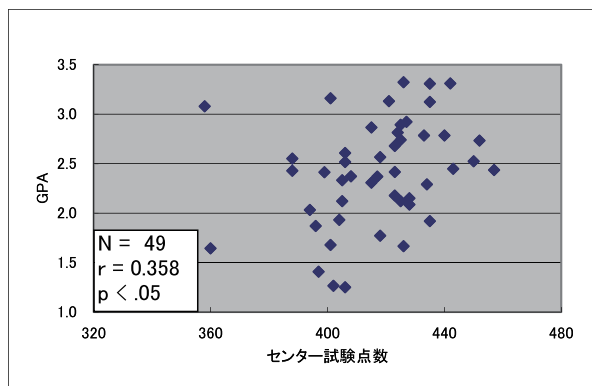


Figure 23 センター試験点数と入学後成績 (GPA)
生活科学部 (2 学科)

おわりに

以上、お茶の水女子大学 AO 入試の現状を志望理由書、二次選抜事後アンケート、入試区分別入学後の成績を中心に分析してきたが、総じて、AO 入試は受験生にとって新たな自己発見につながり学習意欲を高める入試と受け止められ、受験者からは非常に好評であり、入学後も好成績となっていることが明らかとなった。近年、AO 入試入学者の学力低下が一部の大学で懸念されているが、一方、筑波大学や九州大学等の追

跡調査や 16 年間に及ぶ慶應大学の追跡調査では AO 生の優位が報告されており、本学は後者に当てはまると言えるであろう。本学においても今後、卒業後の進路や大学生活の満足度、成績以外の活動なども含め、経年変化を調査していくことが重要であると思われる。

また、これからのグローバル化がさらに進展する世界において、日本国内だけでなく世界の大学との比較検討も行い、日本の入試改善の参考にしていかなければならない。筆者は 2008 年にハーバード大学を訪問し AO 担当官にインタビューを行い、2009 年には韓国の AO セミナーで「お茶の水女子大学の AO 入試」について講演依頼を受けおこなってきたが、その際にも比較研究や共同研究の必要性が指摘されている。今後、アメリカ、ヨーロッパ、アジア諸国の AO 入試も視野に入れながら、入学後の追跡調査や入試広報調査等を継続していく必要があると痛感している。

参考文献

- 慶應義塾大学 (2006) 『平成 17 年度文部科学省先導的の大学改革推進委託事業「受験生の思考力、表現力等の判定やアドミッション・ポリシーを踏まえた入試の個性化に関する調査研究」報告書』第 2 分冊, 11-56.
- 文部科学省 (2010) 「平成 22 年度国公立大学入学者選抜の概要」『大学資料』189,45-49.
- お茶の水女子大学 (2010) 「平成 23 年度お茶の水女子大学特別入試学生募集要項アドミッション・オフィス入試 (AO 入試)」
- 柴田洋三郎 (2009) 「アドミッションセンターの現状と課題」『大学入試フォーラム』31, 17-24.
- 渡辺哲司、福島真司 (2008) 「公表データからみる AO 入学者の評価—国公立 16 大学からの追跡調査報告レビュー」『大学入試研究ジャーナル』18,131-136.

2011 年 2 月 13 日 受稿